

立命館大學白川靜記念東洋文字文化研究所・ 漢字學研究會シンポジウム「中國古文字學研究の最前線」報告

秋 山 陽 一 郎

本シンポジウムは、立命館大學白川靜記念東洋文字文化研究所（以下、本研究所）および漢字學研究會（以下、本會）の主催により、

二〇一九年二月二十四日（日）、立命館大學衣笠キャンパス創思館カ
ンファレンスルームにて開催されたものである。第一部の講演に先
立って、主催者を代表し、杉橋隆夫研究所長より開會の辭、および常
置化された本研究所の紹介と當シンポジウム開催の経緯についての説
明があり、次いで本會代表でもある大形徹立命館大學衣笠総合研究機
構客員教授より、漢字學研究會およびその會誌『漢字學研究』の紹介
があった。第一部の講演會は、二松學舎大學より戸内俊介氏、北海道
大學より西信康氏をお招きし、お二人に本研究所客員研究員の落合淳
思氏（本會會員）を加えた三氏によって行われた。

第一部 講演

○戸内俊介（二松學舎大學文學部准教授）

「出土文字史料に見える古代中國語文法の變遷：『其』を中心に」

最初に行われた標題講演は、戸内俊介氏の著書『先秦の機能語の史的發展―上古中國語文法化研究序説』（研文出版、二〇一八）に一部基づいて行われた。まず最初にご自身の研究領域についての簡潔な説明があった。すなわち、その研究対象は上古中國語、目的は古代語の「復元」、利用する史料は甲骨文・金文・楚簡をはじめとする出土文獻と、同時代の傳世文獻（『尚書』『毛詩』『春秋左氏傳』『論語』『孟子』など）。特に出土文獻は時代や地域を確定しやすい史料であるとしてその重要性を強調されていた。

上古中國語における副詞の「其」については、從來、意思・命令・

○西信康（北海道大學大学院文學研究科専門研究員）

「今振り返る、出土文字史料の發見と諸子百家の研究」

推量・疑問といった多義語や、婉曲の語氣を表すなどとされてきた。だが先行する魏培泉氏や戸内氏は、主要動詞の前の「其」はモダリティ（話者の主観）副詞と判断すべきで、非現實（話者が実體験していない）事態を語るマーカーであるとみる。「意思」「命令」「推量」といった區別は、「其」が文脈に入り込んだ段階で分かれる解釋であり、どの場合においても「非現實事態」から外れることはないという。講演ではこの「其」について、上古中期（東周時代）・西周時代・殷代における用法の變遷が適及的に説明された。ただし、甲骨文の對貞に見られる用例は西周以降では少ないとし、ここで殷・西周間における言語的不連続性が示唆された。

續けて戸内氏は、①甲骨文における「衷」など、義務を表すコピェラが西周以降の文献でほとんど見えないこと。②連體修飾語「之」が西周以降、あまり見られないこと。③「朕」の格分用が殷では緩やかだが西周では嚴格であること。④甲骨文的「于」＋時間詞は未來時指向だが、西周以降には見られないこと。⑤「弗」は目的語を伴っていない他動詞・前置詞を否定するが、甲骨文では目的語を伴う他動詞を否定することなどといった傍證を挙げ、甲骨文における言語と西周以降における言語との間には斷絶があると結論づけた。

西信康氏は『郭店楚簡「五行」と傳世文獻』（北海道大學出版會、二〇一四）で知られる出土文獻（思想、畑の研究だが、近年は出土文獻の意義や効用を、傳世文獻側の視點から浮き彫りにしようとする）と試みながら、講演はまず最初に、この半世紀來の諸子百家關連の出土資料を概観することから始められた。『五行』はそのうちの馬王堆漢墓と郭店楚墓から出土している。

『五行』とは「仁」「義」「禮」「智」「聖」の五つの行いを總稱した呼稱で、陰陽五行の「五行」と區別するためにしばしば「ゴコウ」と讀まれることもある。その内容・語彙が、子思の『中庸』や孟軻の『孟子』と共通する部分を持つことから、子思が「五行」を唱え孟軻がこれを敷衍したとする『荀子』非十二子の記述が、『五行』の發見と共に一躍注目を集めることとなり、郭店楚簡『五行』こそが非十二子の指す「五行」であると考えられるに至った。ただ、西氏は非十二子の記述があまりに斷片的すぎることから、郭店楚簡『五行』が非十二子でいうところの「五行」であると斷定する決め手にはならないだろうと慎重な態度を取る。本講演では主にこの『五行』の内容・思想を概観、またその人治思想に言及し、法家や道家に見られる人治思想批判や、儒家による反論についても取り上げられた。

最後に西氏は、「『五行』は儒家文獻なのか？」という疑問を起點に、

「儒家」という枠組みに對する再検討の必要性を示唆する。また同時に、子思↓孟子↓荀子のような單線的思想史觀への警鐘を鳴らし、よりパ
ラレルな複線的思想史觀の必要性を強調した。

○落合淳思（立命館大學白川靜記念東洋文字文化研究所客員研究員）

「甲骨文字と骨占」

落合淳思氏の研究は、①『甲骨文字辭典』（朋友書店、二〇一六）

に代表される漢字學研究と、②『殷代史研究』（朋友書店、二〇一二）
に代表される殷代史研究に大きく分けられるが、本講演はこのうちの

②殷代史研究から取り上げたテーマである。殷王朝については、系譜・
祭祀儀禮・信仰・軍事・地方支配・都市・墓葬・曆譜・生活文化・農
業・牧畜・青銅器・玉器・甲骨占卜・文字・言語といった諸領域があ
るが、本講演ではこれらの中の「甲骨占卜」にフォーカスしている。

甲骨占卜は、龜の腹甲もしくは牛の肩甲骨に熱を加え、出現したひ
び割れの形によって吉凶を判断する。落合氏は、この甲骨占卜の再現
實驗を獨自に行う過程で、甲骨背面の窪みが重要であることに気づく。

この背面の窪みを彫らない場合、ひび割れの形状は完全に予測不能で
あったが、逆に殷代の甲骨と同様の窪みを彫ると、殷代と同様の「卜」
字形のひび割れが出現するという。この結果、殷王朝の甲骨占卜は、
殷王が望んだ内容に占卜結果を操作しうることがわかり、殷王朝の「神
權政治」が神への信仰を利用した政治であったことを確認できたことす

る。また、生まれてくる子が男子か女子かを占うような受動的な占卜
の場合は、事後に記録の改竄があったのだろうと落合氏は推測する。
このほか、講演では落合氏が取り組んでいる「甲骨文字全文検索デー
タベース」の紹介とデモも行われた ([http://koukotsu.sakura.ne.jp/
top.html](http://koukotsu.sakura.ne.jp/top.html))。

第二部 シンポジウム：中國古文字學研究の最前線

○大形徹（大阪府立大学教授／立命館大學衣笠總合研究機構客員教授）

○戸内俊介（二松學舎大學文學部准教授）

○西信康（北海道大學大学院文學研究科専門研究員）

○落合淳思（立命館大學白川靜記念東洋文字文化研究所客員研究員）

○佐藤信彌（立命館大學白川靜記念東洋文字文化研究所客員研究員）

後半のシンポジウムは、第一部でご講演いただいた三氏に、西周史
を専門とし、『周・理想化された古代王朝』（中公新書、二〇一六）や
『中國古代史研究の最前線』（星海社新書、二〇一八）の著書がある本
研究所客員研究員の佐藤信彌氏（本會會員）をパネラーに加えて行わ
れた。司會は引き続き大形徹氏。

まず、第一部の講演内容に關する質問や感想をフロアの方々に紙に

書き出していただき、パネラーがその内容に答えるという形式がとられた。司會者の圓滑な進行や、パネラーの方々の簡潔・的確な説明もあって、限られた時間の中ではあったが、フロアからいただいた質問すべてが回答された。

続けて「青銅器や簡牘に關して、考古學的な發掘を經ていない史料をどう扱うか？」が議題にされた。この問題について佐藤信彌氏は、非發掘簡の史料活用可否的富谷至氏の「骨董簡」とよばれるモノ（『地下からの贈り物』東方書店、二〇一四）を念頭に、晉侯墓地から楚の事跡を記した青銅器（楚公逆鐘）が出土している事例を挙げ、遺物と出土地が文脈的に切り離されている状態の遺物もあって、銘文だけから内容を判断しなければいけないケースがあることを指摘する。その上で、非發掘品だからといって史料から切り捨てるというのは亂暴なのではないかと富谷説を批判する。戸内俊介氏も、大西克也氏の言を引いて「非發掘品を棄てることは」辨偽の努力を放棄している」と同じだと佐藤氏に同意するが（大西克也『非發掘簡』を扱うために）『中國出土資料の多角的研究』汲古書院、二〇一八）、戸内氏の指摘で興味深かったのは、非發掘簡の登場によって、二〇一一年以降、北京大學藏秦簡の例に代表されるように、従来はなかった詳細な「室内發掘」の情報（竹簡の化學處理に關する情報など）が公開されるようになってきたことである。こうした知見や情報によって、眞偽判定の水準は近年かなり上昇した。だが、その一方で、そうした情報が公開されるほど、贋作品の作者に大きなヒントを與えてしまうというジレンマも同時に抱えることになる。一方、戸内氏は、青銅器の辨偽に

ついて、崎川隆氏の「銘文重合法」（『銘文重合法』對商周青銅器銘文辨偽研究の有効性）『出土文獻研究視野與方法』五、二〇一四等）を紹介し、現在著録されている青銅器の中で字形や配置が完全一致する器に、今後、偽作判定されるものが増える可能性を示唆した。甲骨文については、落合淳思氏によれば、幸いにも近年の偽作はほぼ気にしなくて良いという。昔の偽作品については、贋作の技術が高くな、ほぼ見分けがつくとのこと。

次に「中國古文字學の新しい研究成果や新出史料（特に戰國竹簡に關するもの）を一般向けの字書の解説や『漢字の成り立ち』に關する學習參考書にどう反映させていくか？」が議題となった。まず落合氏は、自身の取り組みとして、小學生向けの漢字の成り立ちについて解説した本を出すなど、比較的新しい研究成果を取り込むことができているという。戸内氏は『字源』（李學勤主編、天津古籍出版社、二〇一二）のような新しい成果を盛り込んだ字書が日本にもあって良いと思うと提言。西信康氏は、勤務先の高校やその中部の國語科教員にどの漢和辭典を使っているか尋ねたところ、生徒に漢字の成り立ちを説明する時を例外として、基本的に全く使っていないとの返答が戻ってきたという。西氏は『新選漢和辭典』（小林信明編、小學館）など、漢和辭典の巻末の附録がどれも一流の概説になっていることに着目し、そこに戰國文字などの新しい研究成果を盛り込むことができているのではないかとする。最後に大形徹氏は、馬王堆帛書『胎產書』を翻譯した時の經驗談として、『胎產書』で頻見する「始」を「胎」と讀むことで、文意が通じることに気づいた話を紹介し、漢代に限られ

た事例ではあるものの、そうした用例も字書の中に加えることができるのではないかと語った(大形徹『胎産書』の『始』、『漢字學研究』三、二〇一五。大形徹『胎産書・雜禁方・天下至道談・十問』東方書店、二〇一五)。

最後に、ご多忙の中お運び下さった方々、ご登壇下さった先生方、スタッフをはじめとするすべての関係者各位に、この場を借りて厚く御禮申し上げます。漢字學研究會主催のものとしては初のシンポジウムであったが、参加者四十二名という盛會裏に終えられたことは、ひとえに右の皆さまのお蔭をもってである。



第二部シンポジウムの様子より

